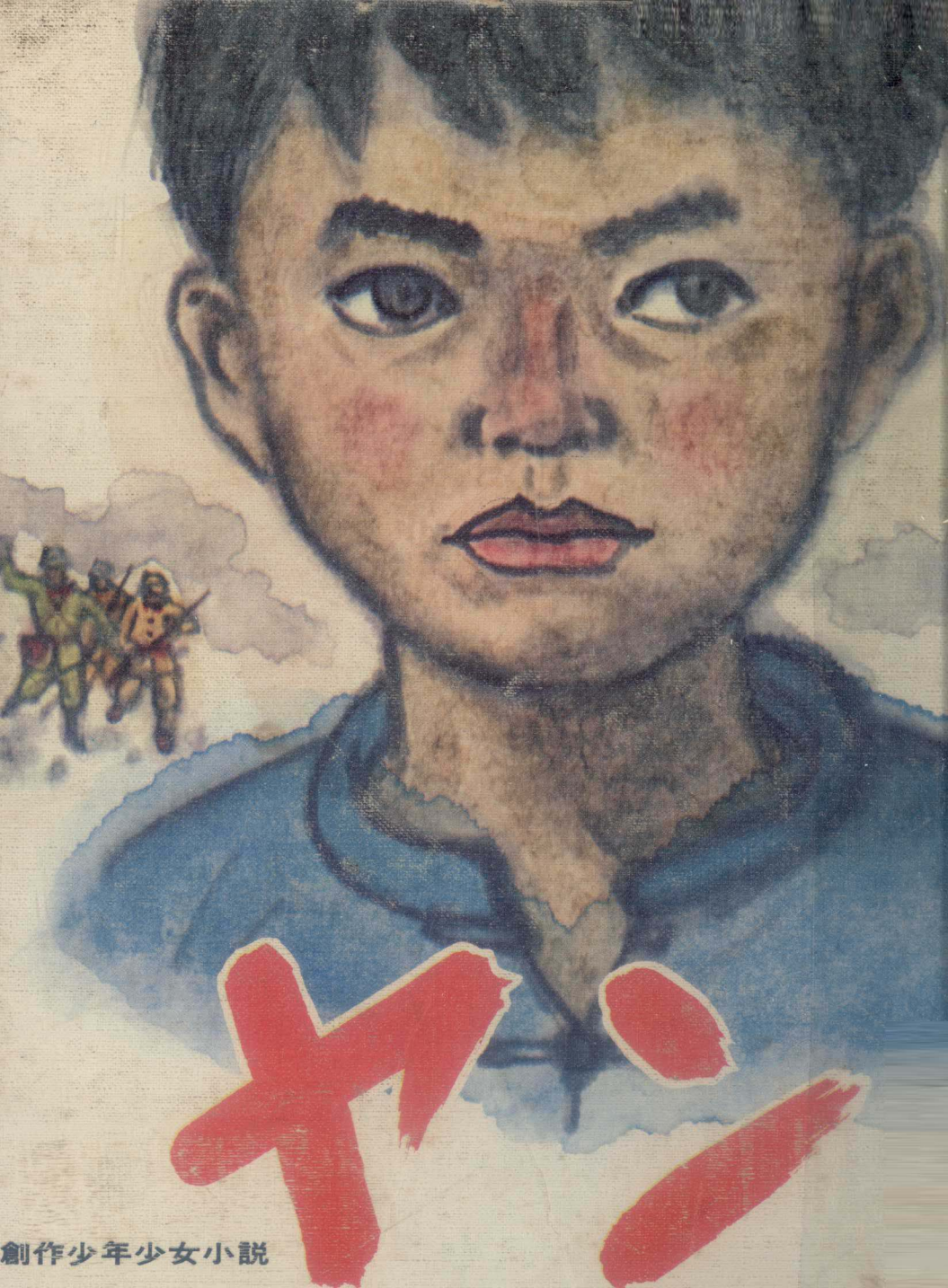




創作少年少女小説



「ぼくたちのかくれ^{ほあんたい}隠れ人、保安隊がふみこんだんだ！」 (219ページ)

NDC 913

創作少年少女小説

ヤ ン

前川康男著

実業之日本社

1967年

264 ページ

21.5cm

本文9ポ活字使用

著者の了解により

検印省略

ヤ ン

1967年 9 月 25 日 初版発行

1968年 7 月 10 日 3 版発行

著 者 前 川 康 男

発行者 増 田 義 彦

印刷所 株式会社 東京研文社

発行所 株式
 会社 実業之日本社

東京都中央区銀座西1～3

TEL (562) 4311 板替東京323

定価 560 円



装幀・さしえ 久米宏一

創作少年少女小説

十二

前
川
康
男



・もくじ・

第1部 揚子江の星^{ようすこう} 5

第1章 6

第2章 26

第2部 長江のヤン^{フアンチャン} 37

第1章 38

第2章 52

第3章 97

第3部 ヤンのながい旅^{なほ} 131

第1章 132

第2章 150

第3章 175

第4章 203

第4部 南十字のひとつの星 221

第1章 222

第2章 235

あとがき 260



まえがき

これから、お話するのは、一九四四年（昭和十九年）の春から、一九四五年の夏にかけての、揚子江ようすこうのほとりにいたヤンという少年の物語です。

日本と中国ちゅうごくの、八年にもわたる、ながい悲惨ひさんなたたかい。その戦争せんそうのさなか、揚子江ようすこうの川べりには、戦争せんそうにいためつけられた子どもたちが、どろだらけになってあそんでいました。学校へいっていない子、父や母をうしなった子もいました。

フォン・ヤンも、その中のひとりです。

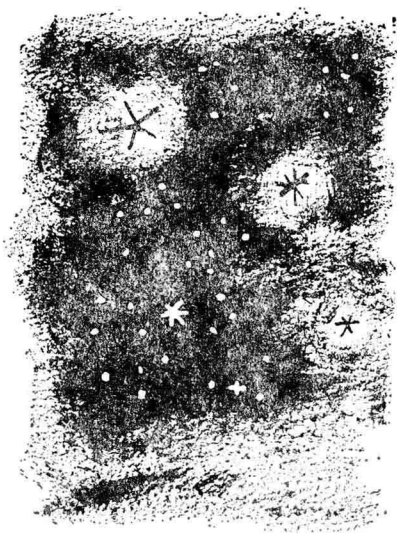
十三歳。いつも、いたずらがしたくてたまらないというような目をした、すばしっこい、えがおのかわいい少年でした。

太平洋戦争たいへいようせんそうの末期まつぎ。

アメリカ空軍くうぐんの爆撃ばくげきは、日ましにはげしくなっていました。……

第1部

ようすこう 揚子江の星



第 1 章

1 揚子江のほとり

フォン・ヤンの話をするまえに、揚子江のほとりのこと、私がいた浦口（ブーコウ）という町のことを、ちょっとお話することにしましょう。

一九四四年。

八月のある日、やけつくようにあつい日のことです。

私は、揚子江の川べりの道を、川しもにむかって歩いていました。

それまで、私は、北のほうの戦線にいたのですが、命令がでて、汽車で南へくだったてきたのです。揚子江・北岸の浦口という駅につき、その町にある高射砲の陣地へいくところでした。陣地は、駅から千メートルばかりはなれた、川べりにあり、その日の昼までに、陣地にはいれという命令だったのです。

へまるで海みたいだ。茶色い海だ……。

私は、はじめて見る揚子江をながめて、そうおもいました。



北岸は、浦口。^{プーコウ}南岸は、南京。^{ナンキン}

揚子江は対岸の南京の川べりが、かすんではつきり見えないほどの、川はばが二千メートルもある大きな川でした。水の色は、茶色で、どろんとにごっています。白っぽい茶色といったらいでしょうか、コーヒーにミルクをたくさん入れたような色でした。

大、中、小、さまざまな船が、たくさんのはりくだりしていました。

ぼっ　ぼっ　ぼっ　ぼっ　ぼっ……

たん　たん　たん　たん……

どっ　どっ　どっ……

エンジンの音が、まざりあって、どん、どん、どんと、ひびいてきます。生き生きした、川の鼓動です。

帆をかけた船、小さい川船、蒸気船、平べったい石炭船。その中に一せき、特別大きい汽船のような船が、対岸へむかって、ゆっくり走っていました。二千七、八百トンくらいの、灰色の、きみょうなかたの船でした。

チベットの山おくから五千キロ、西から東へ、中国大陸をまっぶたつにたちきっている、世界で四番めにながい川……、ときいていましたが、なるほど、揚子江は、川というより海のように見ええました。

へさあ、これからいく高射砲陣地は、どんなところかな……、どんな中隊長がいるのだらう……、兵隊は……。そんなことを考えながら歩いていると、うしろから、

ホイッ、ホ、ホイッ、ホ、ホイッ、ホ……と、かけ声が、きこえてきました。ふりかえると、一台の人力車が

走ってきて、スツと、私を追いこしていったのです。その人力車というのは、お客をのせて、車夫がひっぱって走る二輪車で、洋車とよんでいる車でした。なにしろ、つよい夏の日が、頭の上からジリジリてりつけているの

ですから、洋車ヤンチュをひいている中国人の車夫しやふは、あせびっしりでした。

ホイッ、ホ、ホイッ、ホ……と、かすれた声をあげ、あせをとばしながら走っていきました。のっているお客は、日本人でした。カーキ色の軍服を着た、わかい見習士官みならいしかんです。ホイッ、ホ、ホイッ、ホ……と、洋車ヤンチュは、たちまちとおくへいってしまいました。

川べりには、大きな棧橋さしはしや船着場ふねうちば、石炭をピラミッドのようにたかく積みあげた石炭の集積所しゅうくきじよが、ずらりとならんでいました。道ばたには、たべものを売る露店ろてんが続ぎ、浦口ウイコウという町は、なかなかにぎやかな町でした。しばらく歩いていると、ホイッ、ホ、ホイッ、ホ……と、また洋車ヤンチュが一台、私のよこを走っていったのです。その洋車ヤンチュにも、さっきとおなじように、わかい見習士官みならいしかんがのっていました。

「やあ、やっぱり、きみも、ここか。」

私が、高射砲陣地の門のまえにくると、洋車ヤンチュにのっていたふたりの見習士官みならいしかんが、わらいながら声をかけてきました。

「たぶん、この陣地じんちへくるんだらうとおもって、まっていたんだよ。山本やまもとだ、よろしく。」

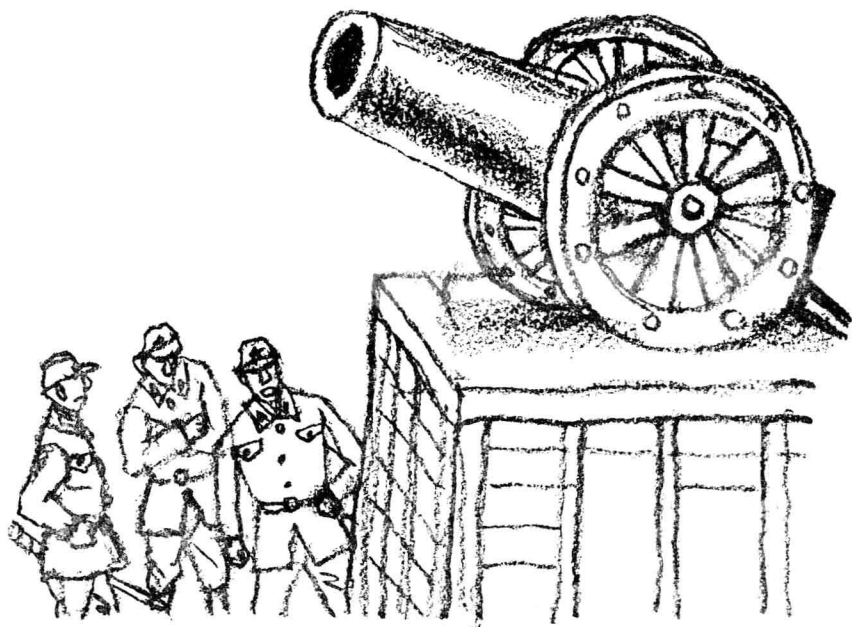
丸顔けつしよくで血色のいい、小ぶりの男がいました。

「ま、なかよくたのむよ。三人よれば、なんとかっていうからね。おれは、衣笠きぬがさっていうんだ。」

背がたかく、すこし青白い顔の見習士官みならいしかんが、手をさしだして、私に握手あくしゆをしました。

「こっちこそ、よろしく。」

三人は、おなじくらいの年齢ねんれいでした。



私は、こうして、山本と衣笠という、ふたりの見習士官といっしょになり、それから一年あまり、その川べりの陣地でくらすことになったのです……。

私たちは、陣地にはいり、まず中隊長のところへあいさつにいきました。

中隊長は、チョビひげをはやした、背のひくい、いかめしい軍人というより、学校の先生みたいな感じで、私は、ちよつとホツとしました。でも、六年も中国にいるという中隊長の目はするどく、三角目玉でキラキラり私たちを見ながら、大きな声で、こういいました。

「われわれは、ひじょうに重要な任務をもっている。」
はげしい戦闘できたえられたような、たくましい声でした。

「われわれは、日本軍の血路ともいふべき、輸送路を準備しておる。揚子江の輸送路だ。揚子江には、橋がない。武器、弾薬、食糧、兵員、これらをおくる橋がない。つまり、鉄道が、この川で、ぶつくりきられておる

のだ。では、どのようにしておくか。それは、二せきの貨車輸送船しかない。航送船という船だ。」

中隊長の話をきいて、私は、ああ、あの船だなおもいました。さっき見た、灰色の、二本えんとつの、きみようなかたの船、あれが航送船だなど、おもいついたのです。

「金陵丸と、第二金陵丸という二せきの航送船があり、それぞれ、甲板に約三十輛の貨車をのせて、浦口と南京を往復しておる。われわれは、この航送船、および航送船の棧橋を死守しなければならない。この船は、日本軍の物資をはこぶ、ただひとつの路、つまり血路だ。この棧橋を破壊されたら、北から南へ、南から北へ、軍の物資を輸送することができなくなる。わかるな。」

「ハッ！」

三人は、声をそろえていいました。

「アメリカ空軍は、この日本軍の血路を破壊しようと、爆撃にきておる。爆撃は、日ましにはげしくなるばかりだ。そこで、きみたち三人の優秀な見習士官に、この陣地にきてもらったわけだ。きみたちは、日本で高射砲の訓練を、みっちりつんできた。どうか、この血路を死守してほしい。たのむぞ！」

「ハッ！ わかりました！」

私たちは、元気のいい声でこたえました。

中隊長の話をきいたあと、私たちは、さっそく、高射砲を見にいきましたが、大砲をひと目見たしゅんかん、三人とも、あつと声をあげてしまったのです。「ハッ！ わかりました！」と、声をそろえていった元気もどこへやら、大砲を見つめたまま、しばらくぼんやりつたっていました。

陣地には、揚げパンのドーナツのような形に、土をたかくもりあげてつくった、まるい壕が三つあり、その中

に大砲が一門ずつはいっていたのですが、その大砲は、私たちが見なれている高射砲とは、にてもつかぬものだったのです。高射砲は、敵の爆撃機や戦闘機をうちおとす、つまり、とんでいる飛行機を射撃する大砲ですから、砲身はながくほそく、あげさげ、左右の回転もすばやい、スマートな感じのものでした。ところが、そこにあったのは、

みじかくて、ふとい砲身、

大きな車輪、

ずんぐりしたかつこう、

飛行機を射撃するためのこまかい機械など、なにもついていない大砲だったのです。

「見習士官、われわれは、これで米軍機をうちおとすんだ。気力でうつんだ。はやくこの火砲になれてほしい。」

中隊長は、そういつて、兵舎へもどっていききました。

「こりや、山砲だ……。」

山本見習士官は、中隊長がいなくなると、なさけない声でいいました。

陣地にある三門の大砲は、敵機をうつ高射砲ではなく、山砲という名まえのとおり、山や野をかけめぐってたかうときにつかう大砲でした。地上の戦闘で、敵陣や戦車をうつ山砲だったのです。

山砲は、木でくんだ二メートルばかりの台の上のせてありました。

「これで、爆撃機をうつというのかい。高射砲だって、うまくあたらないというのに、山砲じゃ、いくら優秀なおれたちでも、とてもむりだね。」

衣笠が、いいました。

「ねらっているうちに、敵機は、一キロも、二キロも先へいつてしまうぜ。」

山本見習士官は、たかい台の上の山砲を見あげていました。

「こりや、死守しなければならぬのは、おれたち自身のいのちかもしれない……。」「

私が、そうつぶやくと、

「そうかもしれない。」

ふたりも、フーッと、ためいきをつきました。

2 夜間爆撃

山砲の威力は、すぐつぎの日に、はっきりわかりました。

夜ふけに、コンソリデーテッドB24という、アメリカの爆撃機が一機、航送船の棧橋をねらってやってきたのです。

「高度、千（メートル）！」

B24を、サーチライトが追跡していました。川べりの高射砲陣地は、私たちの陣地だけではなく、南岸と北岸に、六か所ばかりあって、南岸の高射砲が、ドカンドカン射撃をはじめていました。空襲を知らせるサイレン、サーチライトのきらめき、爆弾の落下する異様な音、閃光……。

私たち三人は、三つのドーナツがたの壕の上にひとりずつあがって、兵隊に射撃の準備を命令しました。高射砲だったら、絶好の目標です。

七、八人の兵隊が、山砲の砲尾にとりつき、ヨイショ、ヨイショとまわしながら、ねらいをさだめます。

「うてッ！」

三門の山砲が、火をふきました。

ドッカーン！

高射砲とは、まったくちがう、大きな発射音にびっくりして、一発うっただけで、私は空をおおぎました。

二秒、三秒。

パッカーン！

パッカーン！

パッカーン！

黒い空に、赤い光が三つきらめきました。ところが、それは、私が見ているほうとはぜんぜんちがう、とんでもない方角で炸裂したのです。

「ひどい大砲をあずけられたもんだ。」

「爆弾が揚子江におちて、二十メートルも水柱があがったよ。ふんすいみたい。五十キロ爆弾だ。あれが、この陣地に一発でもおちてみる、みんなふっとんでしまっぜ。」

「敵機を、おどかすだけに射撃するようなもんだ。」

空襲がおわって、私たちは、空を見あげて、がっかりしました。がっかりすると同時に、これから、あたらな
い大砲で、アメリカ空軍とたたかうのかとおもうと、すっかりおそろしくなりましたのです。

空襲のおわたたあこの川べりは、まっくらで、あかりはひとつもありませんでした。日本軍が、嚴重な燈火管制の命令をだしていたからです。中国の民家に、あかりを、いっさいそこにもらすなといってありました。夜間爆撃にくる米軍機に、航送船の棧橋の位置や、日本軍陣地の場所を発見されないようにしていたのです。

揚子江の川べりには、海べのような砂浜がありました。とても川の砂とはおもえないような、サラサラした、きれいな砂浜が、ながくつづいていました。

私たちは、空襲のないときは、たいいてい陣地をでて、この砂浜にねころがって、ひるねをしたり、本を読んだり、むだ話をしてすごしました。いつ爆撃でやられるかわからないのですから、砂浜にねころんで、「きょうも生きのびた……」と、生きているといううれしさを、ゆっくりかみしめていたのです。

私や、山本、衣笠の三人は、見習士官という、少尉よりひとつ階級の下、将校でした。将校というより、将校になるための見習い、つまり将校のたまごです。よく、私たちは、年期のはいった古い兵隊に、たまごだとかひよこだとか、いわれましたが、一年ばかりの間に、一足とびに見習士官になった、将校のたまご、年数からいったら、ひよこ、みたいな軍人だったわけです。二等兵、一等兵、上等兵、兵長、伍長、軍曹、曹長、准尉、見習士官、少尉……というじゅんで、二等兵から曹長になるには、三、四年はかかるのに、学生あがりの私たちは、二等兵から見習士官まで、たった一年という、インスタント軍人、にわかづくりの見習士官でした。

三人とも一年まえまでは大学の学生だったのです。

「おまえたちは、ちっとも軍人らしくない。学生みたいじゃないか。軍人精神がはいっておらん！」

どこへいっても、私たちインスタント見習士官は、中隊長や大隊長、連隊長にどなりつけられました。たしか